

「完全なものに！！」 ～何かが欠けていませんか？～

マタ5：48

最近「我に返る」瞬間がありましたか？忙しい毎日を送るなかで、目の前の状況に気をとられてしまっただけで、冷静になると実は大したことではない…と言うことがありませんか？神さまは私たちに平安を与えてくださいます。ところが、その平安を与えてくださる神から離れて目的を失っていると冷静ではなくなります。自分の予想だにしていなかったことが起こると、非常に慌てて恐れて、不安になったり怒ったり…冷静さを欠いてしまいます。だから私たちはいつも何かあったら我に返って冷静でいなければいけないのです。そのために、今回のテーマは「完全なものに！！～何かが欠けていませんか？」なのです。完璧な人間になれ、と言うものではありません。聖書の完全はそういう意味ではありません。自分の欠けた所に気づきなさいと言っているのです。ところが気づいた時に多くの人は「自分はダメなんだ」と落ち込んでいきます。ダメな所に気がついたら落ち込むのではなく、その部分を補えばいいのです。放蕩息子の話(ルカ15:11～32)です。この時代のイスラエルで息子が父親が生きてるうちに財産をくれというのは、考えられないことです。父親はこの息子を罰しても良かったのに、財産の半分を分けてやります。そしてこの息子は家を出て行ってお金目当ての友人と遊興三昧です。結果、無一文になって、民から忌み嫌われている豚の世話をし、別名「鳥の糞」と言われる無価値な豚のえさであるイナゴ豆でさえ食べたいと思っても食べられない身になりました。この息子は自分の目的を見失い、神さまが計画していた完全な道から外れて不完全にしてしまいました。だから神さまは彼に我に返させるチャンスを与えたのです。これが大事です。私たちは自分が進んでいる人生の道を顧みることがあるでしょうか。見つめ直すことがあるでしょうか。この様な機会はなかなかないのではないのでしょうか。何か問題に直面すると「私は悪くない」と口ではそう言います。しかし心の中では「どうして自分はこうなんだ」と責めます。だけど神さまはこの我に返った時に私たちにチャンスを与えてくれているのです。だから私たちはこれから目を背けてはいけません。聖書のなかでは「ピンチはチャンス」「問題は祝福の前触れ」なんです。だから、このチャンスを逃さないために①**秤がずれていませんか？**と言うことを確認しましょう。この放蕩息子はお金もいっぱい友だちもいっぱい秤がずれてしまいました。自分が何者であるか、何のために生きるのかを見失ってしまいました。そして自分を守るために平気で相手を傷つける言っただけの言葉を出してしまうのです。秤がずれているからです。神さまが私たちのために用意して下さった将来から視線がずれて他人と比較して怒ったり落ち込んだり…完全に秤がずれています。(申命25:13～15)秤が壊れると冷静さを欠いてしまいます。他人と比較して怒ったり落ち込んだりするたびに秤が私たちには備えられているのです。この秤は、人の良い所を見つけて評価するためにあります。他人の不足を見つけて補ってあげるためにあるのです。私たちが間違っただけの秤の使い方をするとならば自分が傷つくのではなく他人が傷つきます。この様なことをしてはいけません。そして②**我に返る**。失望を恐れない。で、いましょう。過去に目を向け振り返ると我に返るのでは意味が違います。間違っただけから我に返って元に戻るのとは聖書のいうメタノイア=悔い改めです。放蕩息子は我に返るために、失望のどん底に追いやられる必要があったからこのような現状に陥ったのです。彼は自己中心のせいで秤がずれて神さまが用意して下さった素晴らしい環境に満足できませんでした。自分が、現状がくすんでも輝いてなくてもいいんです。無価値に思えるものでも信じて行動し続ければ必ず実を結んで光り輝くものに造りかえられるのです。意味のないことなんてあり得ません。「完全なものである」とは無意味・無価値に思えることでも信じてほしい行動をし続けることです。正しいこととはルールではありません。誰もがやっていることとは限りません。時々によって正しいことは違います。その時々で我に返る・ハッとさせられるチャンスがあるはずで、今自分が正しいと思っていることを聖書に照らし合わせてください。聖書の基本は③**愛だろ、愛!**です。(マタ5:43～48)愛の心を持って秤を正しく使えば私たちは道を誤ることはありません。愛の実は優しさです。愛をもって接すればその人は変わります。愛を実行した人はイエス様です。イエス様は、今までのルールを捨てて愛で接するように説きました。放蕩息子を迎え入れた父親の行動は当時のイスラエルでは考えられないことです。そしてこのあり得ない方法で迎え入れられた放蕩息子は私たちです。神さまは私たちの考えの及ばない愛で私たちを受け入れてくれているのです。それからもう1人この話には出てきます。放蕩息子の兄です。この兄も私たちです。ずっと神さまのそばにいて恵まれた生活をしてきたのに放蕩三昧したけれども悔い改めて帰ってきた弟と父を「私には山羊一匹すらくれなかった」と、責めたのです。この兄も弟と同じでした。自己中心な自由を実行したか心の中で沸々と思っていたかの違いだけです。この様な兄の所にも愛のある父は行って「私のものは全てお前のもの」と愛を示すのです。私たちにはこの兄のように神さまからの素晴らしいプレゼントがたくさん用意されています。だけど自分の不足に目を向け他人と比較して正しくない方向に進もうとしてしまいます。これは勿体ないことです。だから今一度神さまに見るべきものを戻していきましょう。この放蕩息子も兄も、愛に溢れた父の姿を見てハッと我に返り、考えを変えられました。このようなあり得ないことが起こっているのです。そしてこのあり得ない愛、十字架の救いで私たちは愛されているのです。だから私たちは秤をなおして、改めて神さまから愛されていることと愛することを知って進んでいきましょう。(要約者：行司 佳世)